

ストックホルム滞在記

～留学経験を生かすには～

京都大学
山本高至
Koji Yamamoto

1. まえがき

スウェーデン・王立工科大学での在外研究は2009年3月まででしたので、帰国後ほぼ2年経過したところです。2010年9月の国際会議で、受け入れて頂いていたJens Zander教授や研究者ら5名と初めて再会しました。また、2010年11月に王立工科大学を訪問し、帰国後に続けた研究結果を報告し、今後の研究計画に関してディスカッションを行いました。それらの場で最も感じたことは、日本でない環境に身をおき、身をもって様々なことを感じる状況にあったという感覚自体を、既に忘れていたことでした。

留学前は、日本と違うことを体験し、特に欧米の方が優れていると思われることを学び、日本での生活にどんどん取り入れていけばよいと思っていました。しかし、その違いが生まれる理由を考えると、国ごとに固有でほぼ不変の歴史的な事柄、宗教的な事柄に行き着いてしまうことがあり、容易に導入することはできないと考えられるようになりました。それでも、留学の体験を生かす方法がないはずはありません。

連載最終回の今回は、日本と比べて欧米の方が一見優れていると捉えられることが多いと思われる「ディスカッション」と「学生に対する給与」を取り上げ、その違いが生まれる根源的な理由を考えるとともに、それらの違いを認識した上でどのように行動すればよいと現在私が考えているかを述べさせて頂きたいと思います。

2. 言語の根源的な違い

研究を行っていませんが感じたのが、「ディスカッション」という言葉が示すものが、それまで自分が思っていたものと随分違うものだったということです。例えば、「どうすれば研究室のアウトプットを高められるか」というようなディスカッションが、グループワークの形で行われた場でのことです。印象に残ったのは「学生の数に対して教員が少なく、指導が行き届いていると思えない。教員の代わりに研究指導ができる優秀なポスドクを雇うべきだ」と、教授の目の前で発言した学生の意見でした。ただ、批判というよりは意見であったと思います。このような意見を日本で学生が口にするのは教授に対する批判として捉えられる可能性が高いため、思っていたとしても伝えるのは一般には難しいのではないかと思います。もちろん、他の人も一緒の場で上司の批判はやめておいたほうが良いということは、海外のビジネス書にもよく書いてありますので、海外では何でも言ってもよいというのは、見当違いでしょう。

英語というディスカッションを、それが使われる背景も含めて日本語に訳せば、「フラットな立場を前提とした議論」ということではないかと思えます。欧米流のフラットな組織が前提にあるからこそ、自由な議論であるディスカッションが可能になっているということ

す。日本では、それが良いか悪いかという議論は別として、文化として上下関係が存在します。すると「フラットな立場を前提とした議論」など不可能です。不可能なものですから、概念を想像すること自体困難なはずですが、日本でもディスカッションという言葉はよく使いますが、フラットな組織というものを体感せずに、ディスカッションという言葉を知ったつもりになっていくことに気が付きました。この経験を、日本に長く住む海外出身の方に話したところ「確かに英語でいうディスカッションは日本にはまずないね」ということで意見が一致しました。

そもそも、日本語では人の呼称自体に上下関係があります。宮崎駿監督の映画『となりのトトロ』で、姉のサツキと妹のメイのやり取りで、「メイ!」「おねえちゃん!」と呼び合うシーンの英語版字幕は「Mai!」「Satsuki!」です(Satsukiの代わりにSis.も使っています。なお、メイは英語版ではMeiでなくMaiです)。姉妹の間ですら無意識に上下関係を大前提とした呼び方をするわけです。姉妹間でフラットな立場で議論しましょうと言っても、相手をフラットな立場で呼ぶことすら困難です。この人の呼称に関する議論は[1]に詳しく書かれており、[1]のタイトルどおり言葉と文化というのは切っても切れない関係があるわけです。

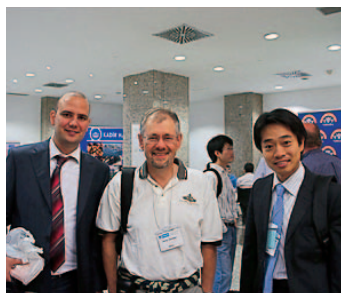
さて、日本で英語の意味でのディスカッションを行いたい場合にはどうしたらよいのでしょうか。これは、フラットな立場の人を集めて議論する、すなわち、同世代の人との間で議論すればよいのだと思います。逆にいうと、世代の違う人と英語の意味でのディスカッションをしようなどと、あまり考えないほうがよいのではないのでしょうか。

また、ディスカッションの場などを含め、海外に行ったときに必要なのは、心理学でいう「メンタルブロック」を外すことだと思います。[2]を引用しますと、

『ほとんどの日本人は、中学から大学までの授業や受験勉強を通して、「間違えてはいけない」という強烈なプレッシャーをかけられています。(中略)「間違えてはいけない」というのは、学生時代に刷り込まれた受験のルールであり、実際のビジネスパーソンのルールではないと認識しましょう。(中略)こういった否定的な思い込みを、「メンタルブロック」といいます。英語を話すためには、英語に関して自分にはどのようなメンタルブロックがかかっているか知り、それを一つ一つ、解いていかなくてはなりません。』ということですが、ディスカッションにおいては、目上には敬語を使わないといけななどというメンタルブロックは外すことです。

3. 宗教などに起因する価値観の根源的な違い

第2回(no. 15, pp. 72-73)で、大学院生は給料を得ていると書きました。良いシステムではないか、日本にも導入したら良いのではないかと、一度は考える方も多いのではないのでしょうか。日本に



国際会議で Jens Zander 教授と再会。



2010年11月末に王立工科大学を再訪問。



雪は綺麗な結晶のまま。



王宮付近。これで午後4時前。

も学術振興会特別研究員制度や国費外国人留学生制度はありますが、受給期間が前もって決まっていることや、途中のチェックがほばないことなど、大きな違いがあります。

さて、大学院生に給料を与えるやり方と与えないやり方のどちらが本来あるべき姿なのでしょう。給料を与えることのデメリットがないわけではありません。給料があると学問をしたいというよりは給料が得られるという理由でレベルの低い人が大学院に流れ込み、学問の質が落ちてしまうかもしれません。対価に見合った成果を短期的に出せない人は淘汰されるかもしれませんが、その人に対するセーフティネットはあるでしょうか。研究室のファンドがなくなり給料が払えなくなると、大学院生でもクビになります。心理学的に言えば、対価を支払うと長期的にはモチベーションが下がるという説[3]もあります。そもそもそのための財源がどこかに必要です。

そして、どうやら労働（ワーク）というものは原罪に対する罰であるというキリスト教などを起源とする価値観[4]の下では、給料は払った方がよいから払っているというより、払わなければならないから払っているだけに思えてきました。また、私は働かないと罪悪感を感じる至って平凡な日本人ですが、どうやら欧米の人たちは逆に休まない罪悪感を感じるのではないかと思えてきました。「旧約聖書」の十戒には（意識ですが）「お休みする日を守りなさい」と書いてあります。一方の日本では明確な根拠がよく分からないのですが、「日本書紀」の中の十七条憲法には役人に限った話ではありますが「朝から晩まで働きなさい」と書いてあります。その昔からそうだとしたら、考え方はなかなか変わらないのではないかと思います。最近、ワーク・ライフ・バランスという言葉がはやっていますが、これもワークが罪と感ずるかどうかで考え方が変わってくるでしょう。そもそも、ワークとライフの二元論が成立するからワーク・ライフ・バランスという言葉が成立するわけですが、ワークが罪でない人には、この二元論は成立しない可能性があると思います。

結局のところ、現時点で私が支持している考え方は「残業しない」ということと、残業するということは、どちらも人が成長するためには、必要なステップである。大切なのは、今の自分にどちらが必要なのか見極めて実行することだ。」[5] というようなことです。何が何でも給与を与えるとか与えないとかいうことではなく、組織の発展にメリットが大きければ、給料を与えて学生を集めるという戦略を使えばよいということではないでしょうか。

また、日本では教員という立場でなくとも大学院生のうちから、最終的な責任を負っていないしろ後輩の指導を行うことが多いでしょう。となると、ある程度は周りに気を遣いながら研究を進めることとなります。このような環境では、自分を追い込んで研究にのめり込みすぎ後輩の世話の手を抜くと、研究室全体としてのパフォーマンスは下がってしまうように感じています。その点、特に客員研究員という立場ですとそのような関係もなくなりますから、自分

を追い込んで研究に取り組むには最適だと思います。

ついでにいうと、宗教的なことに対する行動様式についても、海外経験を経て初めて自信がついてきた気がします。私は[6]という「無宗教」の立場の人間です。「無宗教」と言いつつも、お墓参りに行けばお墓に水をかけて掃除し、友人の結婚式でも忌み言葉を意識して挨拶し、子供にはクリスマスプレゼントを用意した方がよいと感じる日本の常識(?)をわきまえた人間です。とはいえ、何となく宗教に対する態度が破綻しているようで、この行動様式に自信があまりありませんでした。そう感じていた原因は、これも言語の根源的な違いにつながりますが、そもそも宗教という言葉自体が英語の religion の訳語にすぎず、明治になるまで日本になかった概念である[6] ことのように思います。すなわち、日本において宗教を考えるというのは、自分が知りもしない欧米の枠組みを通して日本を見ていることに相当するわけです。私の行動様式・価値観は、宗教という言葉が日本語に入る前から日本人が取ってきた伝統的行動様式・価値観と本質的に変わりなく、欧米における宗教という概念と違うだけであり、だからといって恥じたりする必要は全くないという認識に至っている次第です。

4. む す び

海外では日本に必要なメンタルブロックを外さないとうまくいかなかったことが多々あると思います。日本に帰ってきたときに逆カルチャーショックを覚えました。それは海外に順応して、日本に必要なメンタルブロックを外しっぱなしで帰ってきたためだと思います。

もちろん、スウェーデンに必要なメンタルブロックもあります。酒に酔っぱらって醜態をさらしたり、窓際に洗濯物を干したりできません。この反作用として、スウェーデン人は別の国に行ったときに、お酒で羽目を外しすぎるという評判もあるようです。

このように海外経験を通してメンタルブロックを認識し、意識して外したり付けられるようになれば、世の中を生き抜くための社会的適応能力も上がるでしょう。メンタルブロックといっても、私は否定的には捉えていません。自分の幼い娘には「ご飯を残してはならない」というメンタルブロックをきちんと植え付けようと試みています。失敗する日が多い毎日ですが。

文 献

- [1] 鈴木孝夫, ことばと文化, 岩波新書, 1973.
- [2] 本田直之, レバレッジ英語勉強法, 朝日新聞出版, 2008.
- [3] 市川伸一, 学ぶ意欲の心理学, PHP 新書, 2001.
- [4] 島田裕巳, 金融恐慌とユダヤ・キリスト教, 文春新書, 2009.
- [5] 安田佳生, 下を向いて生きよう, サンマーク出版, 2007.
- [6] 島田裕巳, 無宗教こそ日本人の宗教である, 角川 one テーマ 21, 2009.